

NEWSLETTER #94

研究例会報告

- p. 1 第1回中部地区例会報告.....近藤 博之
p. 3 第4回関西地区例会報告.....山田 優理・玉木 博章
p. 6 会員の OUTPUT

大会実行委員会より

- p. 6 第24回日本ポピュラー音楽学会年次大会のご案内.....南田 勝也

information

- p. 10 事務局より

2012年度第1回中部地区例会報告

近藤 博之・玉木 博章

2012年 第1回中部地区例会

日時： 11月18日（日）13:30-17:00

於： 愛知県立大学サテライトキャンパス
愛知県産業労働センター15F

1. グローカル化するアラビアの唄
エドガー・W・ポープ（愛知県立大学）

ポープ氏の発表は、昭和初期の日本で大ヒットし、オーストラリアでも人気があったアメリカのジャズソング、「アラビアの唄」（“Sing Me A Song of Araby”）についての研究結果を提示しながら、その国際的な旅をエキゾチシズムと音楽産業のグローバ

ル化のなかのグローカル化の一例として取り上げたものであった。“グローカル化”という造語は、「グローバル規模のシステムによって文化製品が流通し（グローバル化）、現地化される（ローカル化）」という概念を示したものである。

「アラビアの唄」は、中東に対するエキゾチシズムを基としているが、中東エキゾチシズムは19世紀にヨーロッパで発展し、20世紀初頭にブームに至った。その中で、「ララ・ルーク」という詩集が19世紀前半に出版され、その後カンタータが19世紀後半に出版されている。カンタータの一曲の中に、“I’ll Sing Thee Songs of Araby”という作品があり、これはイギリスとアメリカで頻繁に演奏及び録音がなされた。この作品と「アラビアの唄」には、①タイトルが似通っている ②“エキゾチックな歌で恋人を感動させる”というテーマが同一である ③アラビアとインドに言及している ④メロディの最終フレーズが似ているといった共通点がある一方、⑤前者が詩的な歌詞、長いメロディであるのに対し、後者はタイトル中心でAABA進行である ⑥前者が「歌ってあげましょう」という発想であるのに対し、後者は「歌ってください」という発想である という相違点がある。「アラビアの唄」は、アート・ソングがティン・パン・アリー化したものだと言える。

次に、「アラビアの唄」について詳細に言及された。本作品は1927年にアメリカで出版されたものであるが、楽譜、ピアノロール、レコードの媒体で輸出され、日本とオーストラリアでローカル化された。楽譜には2種類が存在したが、日本に本作品を紹介した堀内敬三は、そのうちのヴァン・ローン編曲の楽譜を取り寄せたものと推測され、日本で発売されたレコードは、いずれも明らかにヴァン・ローン編曲に基づく演奏がなされている。また、オーストラリア

では、もう一方の楽譜の表紙にアメリカ映画の写真が貼られており、当該映画とのタイアップがなされたと思われるが、これはオーストラリアのみでの現象であったと推測される。

このように日本とオーストラリアでは、「アラビアの唄」が地元のミュージシャンや企業によってローカル化された一方、オーストラリア発売のレコードがアメリカで録音されており、日本発売のレコードにもドイツ録音のものが存在している。このことから、グローバルな音楽産業のいわゆる「中心」のミュージシャンも「周辺」のローカル化に関わっていたことがわかる。

質疑応答では、クレオール化とグローカル化との関連性を発表者がどう捉えているのかといった質問や、「アラビアの唄」のオーストラリアでのローカル化には誰が関わっていたのか、などの質問が寄せられた。

本発表は、「アラビアの唄」を題材とし、グローカル化には様々な組み合わせが存在すること、「中心」も「周辺」におけるローカル化に関わる、といったことなどが最後に示された。

(以上報告 近藤 博之)

2. 巷で大人気であった三拍子曲〈籠の鳥〉と、時を超えて愛唱される三拍子曲〈故郷〉の歪み

三井 徹

三井徹氏による発表『大正時代の大ヒット〈籠の鳥〉分析：三拍子をいまも二拍子で歌う日本人』は、言い換えるならば、日本人に根付いた2拍子のノリを証明しようと試みるものであった。

『籠の鳥』は3拍子の楽曲ながら、当時

の記録音源では時折4拍子が混じる。三井氏は不自然と思えるその4拍子を指摘しつつ、この曲が音楽理論的には欠陥品でありながらも、他方で2拍の手拍子により歌う現代の年長世代の音源と比較し、この楽曲はそもそも3拍子ではなく2拍子で歌われてきたのではないかとの指摘を行った。酒の席でよく使用される、いわゆる宴会2拍子のノリを、日本人独特のものだと捉えたのだ。そしてより若い世代にも馴染みのある『故郷』を例にしてその実証は展開された。歌詞が始まって12小節目、「夢は今もめぐりて」の「りて」の後には、確かに3拍子の楽曲には不自然ともとれる1拍分が設けられる余韻がある。手拍子(2拍1単位)によって歌ってみると、確かに3拍子ですぐに「忘れがたき故郷」と歌うよりは、もう1拍分設けて歌った方が歌い易く、楽曲としての深みも生じる。三井氏が用いた『故郷』の数年前の記録映像は3拍子の伴奏が用いられたものだったが、手拍子だけで歌唱した場合にはもう1拍分の余韻が加えられていたのかもしれない。三井氏は、そもそも日本人の歌唱は、(必ずしも強弱が明確には意識されない)2拍子での解釈がなされており、3拍子という枠組みは西洋音楽理論が輸入される以前には存在せず、手拍子による2拍子こそが日本人のリズムの基本であるという従来の見解を強調した。今後、三井氏は3拍子の楽曲を伴奏無しで、西洋音楽の枠組みを学ぶ前の子ども達に歌わせ、それを聴取したいとのことだった。2拍子のノリが日本語習得の初期段階に既に表れるのではないかという、今後の研究動向も非常に興味深く感じた。

一方で、伝承によって歌い継がれてきた文部省唱歌の、世間一般の歌い方にも言及する本発表は、異なる視点での問題をも想起させうる。2拍子によって解釈されてきた楽曲も、西洋音楽理論の枠組みで3拍子と

して習得した若い世代にとっては、逆に本物の歌い方の方こそ間違いだと感じることもあるということだ。記録やコミュニケーションのメディアが進化する現代では、聴取する順序により必ずしも本物を本物と認識できないこともある。W.ベンヤミンが『複製技術時代の芸術』において述べたことを踏まえれば、伝承以外の習得方法のある現代では、本物に備わるアウラが必ずしも存在するとは限らない。聞いた人間にとっては、皮肉にもシュミラークルにアウラを感じることもあるだろう。どの歌い方にアウラを感じるかは、個人化した人々の選択や人生経路に左右されてしまうという点も、これからの伝統唱歌の伝統そのものにまつわる問題として随伴することに気づかされた。

(以上報告 玉木 博章：私立高校非常勤講師)

2012年度第4回関西地区例会報告

山田 優理

2012年第4回関西地区例会

日時：10月13日(土)14:30-17:30

於：関西学院大学 大阪梅田キャンパス 14階1404号室

細川周平編著『民謡からみた世界音楽 うたの地脈を探る』書評会

細川周平氏(国際日本文化研究センター)

輪島裕介氏(大阪大学)

長尾洋子氏 (和光大学)

司会兼評者：鈴木慎一郎氏 (関西学院大学)

去る10月13日、細川周平氏が編著者を務める著書『民謡からみた世界音楽 うたの地脈を探る』(ミネルヴァ書房、2012)の書評会が関西学院大学大阪梅田キャンパスにて開催された。「考える」・「伝える」・「つくる」の3部全23章から構成されている同著作は、各章の執筆者の研究対象を反映して、扱われる題材も多岐に渡っている。細川氏が序章で述べるところによれば、本書の目論見はふたつある。ひとつは、「各地の民謡採集・流通・言説・価値・応用の歴史と相違を通観」することで、(多彩かつ「面妖」な)民謡の定義を歴史的・地理的な差異、また一般人と研究者との認識のずれに着目して「通文化的に捉え」ること。もうひとつは、主に民族音楽学や民俗学といった学問領域で発展した民謡研究が文化史・人類学・社会学などより学際的な研究対象へと拡大しつつある学術界の「現状を俯瞰する」ことである。

書評会には『民謡からみた世界音楽』の編著者である細川氏をはじめ、寄稿者である輪島裕介氏、長尾洋子氏も参加して議論に加わった。はじめに細川氏から本論集執筆に至る経緯が簡単に示され、2007年から2010年まで国際日本文化研究センターにて細川氏主宰で行われた共同研究「民謡研究の新しい方向」の成果が本書であるとの説明がされた。

評者の鈴木慎一郎氏からはいくつかのコメントおよび指摘があった。まず、本論集の目論見の確認—民謡定義の通文化的考察および民謡研究の現状(民俗学的・民族音楽学的研究から文化史的・人類学的・社会学的研究への舵切り)の俯瞰—があったのち、第一部「考える」のテーマである概念

史(intellectual history)に関する研究はポピュラー音楽をはじめとしてポピュラー・カルチャー研究者のあいだで近年とくに人気があるとの見解が示された。細川氏が今回の論集編纂において影響を受けた著作のひとつとしてブルーノ・ネトル著『世界音楽の時代』を「あとがき」のなかで挙げている点—「本書が扱った多岐にわたるテーマ、たとえば知識人や彼らの調査や概念化、都市部での受容と変容、演唱団体や空間、産業とメディアの関与、政治利用、ポピュラー化、楽譜出版と著作権、編曲、作曲家や演奏家による創造は、大ざっぱにはネトルの見取り図に収まる」—に関しては、世界各地の音楽文化を、それぞれの文化的固有性の枠内で捉えるのではなく、地球規模で起きた同時的な西洋化や近代化への反応として捉える「複数の近代化」とでも呼べる考え方であるとのコメントがなされた。鈴木氏からは続けて、本書全体を通じて「保存する」という(パッシヴな印象を与えやすい)行為と、「媒介する」または「つくる」という能動的な行為との二項対立が前提とされ、なおかつ、後者の行為についての論考に偏重してしまっているという印象を受けるとする指摘があった。

この指摘を受けて長尾氏がまず、パッシヴな意味での保存、「文化財の保存」的な意味での保存という考え方が顕著になってきたのは、おそらく1950年代の文化財保護法以降のことではないかと述べた。これに輪島氏が、「保存する」対「媒介する・つくる」という二項対立の図式は、おそらく90年代にジェームズ・クリフォードが挙げた「消滅の語り」対「生成の語り」の構図がおそらく念頭にあるのではと付け加えた。続けて氏は、この構図においてクリフォードは、「消滅の語り」を批判しているが、今日では、「消滅の語り」を批判する「生成の語り」こそがむしろ権威の位置にある。本論集の

書き手のあいだでは、そうした変化についての共有はされていたと考えられるので、「保存する」をパッシヴな行為、「媒介する」「つくる」を能動的な行為として二項対立に位置づけたうえで後者の「媒介する」「つくる」という面をことさら強調するということはなかったと説明した。

これに細川氏は、「保存する」とは、民謡がそれ以前に属していた文脈とは異なったオーディエンスを想定しているわけだから、保存をおこなう者は同時に媒介者でもあるという主張が成立するのではないかとする指摘を加えた。氏はさらに、「媒介者」への着目というのは、従来の民謡研究のなかで用いられてきた理論的枠組ないし言説以外にも注意を払った本論集の特徴のひとつであると説明した。所収論文のいくつかは、必ずしも民族音楽学者や民俗学者ではない情熱家（文中では「著述と現地調査と演奏と作曲とメディアの間の疲れ知らずの媒介者」と説明されている）について考察を加えているが、彼ら／彼女らがいかなる方法を用いて世界の民謡文化を局面ごとに推進したかを描き出すこと、その活動を元の文化的脈絡のなかで再検討することは今日に至るまでの民謡文化および民謡研究の展開を把握するうえで極めて重要であるとのことである。

つぎに、鈴木氏は幾つかの論文をピックアップして批評を行った。メディア論の観点から柳田國男による民謡論の再解釈を試みる武田俊輔氏の論稿（第五章「柳田民謡論の可能性—歌の発生とその伝承の『場』をめぐる」）に関しては、柳田にあったオーディエンス論的視点を析出、彼が抱いた共同体像が決して一枚岩的なものでないことを主張している点が評価されるとした。長尾洋子氏による大正期の民謡上演空間についての論説（第九章「ホールでうたう—大正期における演唱空間の拡大と民謡の位

置」）は空間への視点が興味深く、とくに民謡が東京のホール（講堂、会館、公会堂）で演唱されることにより「脱埋め込み」化される—もともとの社会的文脈からの引き離しが起こる—という話に終わらず、「再埋め込み」化される—新たな空間および社会的文脈にふさわしい社会関係の構築がなされる—一面に関しても分析を加えている点で注目に値するとした。

会場からも多くのコメントや質問があり活発な議論が展開された。例えば、本書のなかには日本の独自性や特殊性について踏み込んだ考察を行っている論文がみられないが、そのことは研究会でも議題にのぼらなかったのかという質問に対しては、細川氏が、本論集の目的は副題にある「地脈」が示すように「うた」の音楽的・歴史的・政治的な世界規模でのつながりの確認であることを強調、もし日本の特殊性があれば、それは独自の風土や環境に依るものなのであろうが、それを他の地域と比較して政治化するかはまた別の話であると付け加えた。長尾氏の論文のなかで用いられているアンソニー・ギデンズによる理論「脱埋め込み」「再埋め込み」について、ギデンズの言うような「脱埋め込み」化により完全なる脱文脈化は果たして起こり得るのか、媒介者が「脱埋め込み」及び「再埋め込み」を行う際にはそれに伴い本来の文脈もある程度移動させられているのではないかという興味深い問いが発せられたところで終了となった。

（報告 山田 優理：同志社大学大学院）

会員の OUTPUT

1. 戸板律子

「笑いで学ぶシャンソンの歴史 —シャンソン・プリュス・ビフリュオレ『世界一おかしなシャンソン史』—」

『笑い学研究』第19号(日本笑い学会発行、2012年7月)

2. 戸板律子

「フランス・ライブ巡り 2011年春」

『シャンソン・フランセーズ研究』第3号(シャンソン研究会発行、2011年11月)

3. 塚田健一

塚田健一・坂本龍一ほか

Traditional Music in Africa (commons: schola vol.11、2012年12月)

JASPM 第24回年次大会のご案内

大会実行委員長 南田 勝也

日本ポピュラー音楽学会 第24回大会
(JASPM24)のご案内

※大会最新情報はウェブサイトをご覧ください

<http://jaspm24.wiki.fc2.com/>

■日程：2012年12月8日(土)・9日(日)

■開催場所：武蔵大学江古田キャンパス 1号館(西武池袋線江古田駅下車徒歩6分)

■大会参加費等

◎参加費

会員 一般……………事前申込 3,500円 / 当日受付 4,000円

会員 学生(含大学院生)※……………事前申込 2,500円 / 当日受付 3,000円

非会員 大会参加……………4,000円
(当日受付のみ)

非会員 シンポジウムのみ参加……………1,000円
(当日受付のみ)

※学生区分の適用を希望する方は、大会受付にて学生証の提示をお願いします。

※大学院生は、JASPMの会員区分では「一般 個人」となりますが、大会では「学生」扱いとなります。

◎懇親会費(12月8日、18:00-20:00、生協食堂・学生ホール)

会員……………(事前申込)一般 3,500円 / 学生(含大学院生) 2,500円

会員……………(当日支払)一般 4,000円 / 学生(含大学院生) 3,000円

非会員……………会員(当日支払)に準じます。

■参加申込について

◎参加をご希望の会員の方は、既にお送りした出欠確認ハガキで出来るだけ早く参加申込をしてください。大会準備、また総会の成立のために必要となりますので、欠席の場合でも必ずハガキを返送してください。

◎参加費は既にお送りした振込用紙で、大会参加費と懇親会費の合計金額をお支払いください(手数料はご負担ください)。事前申込による振込期限は11月26日(月)とさせていただきます。

◎振込が事情により11月26日以降となった場合は、お手数ですが、振込受領書を大会当日に必ずご持参いただきますようお願いいたします。

◎大会当日のお申し込み&お支払いは、大会受付にて承ります。

◎事前に振り込まれた参加費については、大会を欠席された場合でも返金できませんことをご承知ください

◎大会運営をスムーズにおこなうために、できるかぎり事前申込をご利用いただきますようお願い申し上げます。

■郵便振替口座

郵便払込口座 00100-3-374669

口座名義人 JASPM 大会実行委員会 (ジャस्पムタイカイジッコウイインカイ)

■懇親会

12月8日(土)18時より、生協食堂(学生ホール)にて懇親会を行います。会費は事前振込で3500円、学部生・大学院生は2500円となります。(当日受付の場合一般4000円、学部生・大学院生は3000円となります)。参加予定の方はハガキと振込用紙に記入の上、参加費とあわせてお支払いください。懇親会費はご欠席された場合でも返却できませんのでご了承ください。

■基調講演・シンポジウムのみ参加(非会員向け・当日受付のみ)

8日(土)のシンポジウムのみに1000円で参加することができます(要旨集は配布されません)。また、懇親会の当日参加も歓迎いたします。非会員でシンポジウム参加希望者が周囲におられましたら、ぜひお誘いください。

■総会

8日(土)の16:40(予定)より総会を開催いたします。年に一度の学会の意思決定の機会ですので、会員の方は必ず出席ください。出席できない場合、出欠確認ハガキの委任欄に必要事項を記入の上、返送ください。

■宿泊

ホテル等の宿泊は各自でご予約ください。最寄りの繁華街では池袋が便利かと思えます。江古田には、武蔵大学徒歩1分のウイークリーマンション江古田があります。ウイークリーとありますが1泊から利用できますので、近くが良い方はご予約下さい。

・ウイークリーマンション江古田

<http://www.wmt.co.jp/location/ekoda/>

・池袋の各種ホテル

http://www.jalan.net/biz/130000/STA_990049/

■駐車場

大会開催中の学内には自動車・バイクが入構できません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

■会場地図・アクセス

武蔵大学江古田キャンパスへは、西武池袋線 江古田駅、都営大江戸線 新江古田駅、東京メトロ副都心線 新桜台の3駅3路線でアクセスできます。詳細は大学ホームページの交通案内欄をご参照下さい。

http://www.musashi.ac.jp/modules/annai_kouhou/index.php?content_id=9

■プログラム

2012年12月8日(土)

▼12:30～ 武蔵大学1号館地下1階ロビーにて受付

(当日は武蔵大学経済学部主催のゼミ大会が開かれています。混同なさないようご注意ください)

▼13:00～13:10 開会挨拶・シンポジウム
主旨説明 1号館地下1002シアター教室
13:10～16:30

シンポジウム《音盤を傍らに携えて—レコード・カルチャーの音楽経験》

パネリスト：

片山杜秀(慶応義塾大学)

湯浅学(音楽評論家)

南田勝也(武蔵大学；コーディネーター)

北田暁大(東京大学)

司会：大和田俊之(慶応義塾大学)

▼16:40~17:50 年次総会 1号館地下
1002シアター教室

▼18:00~20:00 懇親会 生協食堂(学生ホール)

2012年12月9日(日)

▼9:00~ 受付開始 武蔵大学1号館1F
ロビー

▼個人研究発表A 1号館2階1203教室
〈司会：小西潤子(静岡大学)〉

9:30~10:00 栗田知宏(東京大学大学院)
ブリティッシュ・エイジアン音楽における
「代表性」をめぐる—考察—メーラーの出演アーティストを事例として

10:00~10:30 松平勇二(名古屋大学大学院)

ジンバブエのポピュラー・ミュージック、
「スングーラ」の誕生と発展

10:30~11:00 全ウンフィ(大阪市立大学大学院)

創造性と物質的条件の間—ゼロ年代後半の
韓国インディーズシーンにおける文化地理

11:00~11:15 休憩

〈司会：増渕敏之(法政大学)〉

11:15~11:45 遠藤薫(学習院大学)

複製技術と流行歌—「船頭小唄」をめぐる
大正期音楽文化変容

11:45~12:15 倉田量介(東京大学非常勤講師)

日本の「大衆演劇」における「大衆」性とは—舞踊のBGMに着目しながら

12:15~12:45 中本善貴(関西大学大学院)

2000年代の日本のヒットソングの研究

—メロディーとコード進行から見る音楽的
効力の社会学的分析

▼個人研究発表B 1号館地下1階1002教室

〈司会：中川克志(横浜国立大学)〉

9:30~10:00 古澤彰(慶応義塾大学大学院)

現代音楽/前衛作曲家がクラブミュージックにもたらしたもの

10:00~10:30 日高良祐(東京藝術大学大学院)

音楽ファイルフォーマットのメディア史に見るフリーカルチャー

10:30~11:00 原島大輔(東京大学大学院)

コンピュータ音楽の相互依譲—フィードバック、ネットワーク、逆シミュレーション

11:00~11:15 休憩

〈司会：吉光正絵(長崎県立大学)〉

11:15~11:45 塚田修一(帝京大学非常勤講師)

アイドルをめぐるコミュニケーションの行方—AKB48とももいろクローバーZを中心に

11:45~12:15 岡田正樹(大阪市立大学大学院)

動画共有サイトにおける音楽実践と人々のあつまり

12:15~12:45 玉木博章(私立高校非常勤講師)

若者の友人関係維持に関する研究—カラオケの選曲を例にして

▼個人研究発表C 1号館2階1201教室

〈司会：小川博司(関西大学)〉

9:30~10:00 古賀豊(新潟大学)

ポピュラー音楽聴取のイデオロギー—われ

われはいったい何を聴いているのか？

10:00～10:30 田口裕介（早稲田大学大学院）

「青春の物語」としての吹奏楽

10:30～11:00 高橋聡太（東京藝術大学大学院）

スタンディング形式の一般化によるライブ空間の変容

11:00～11:15 休憩

〈司会：井上貴子（大東文化大学）〉

11:15～11:45 鈴木真吾（学習院大学大学院博士課程）

雑誌調査からみる国内のヘヴィメタル受容の変化—『BURRN!』を中心に

11:45～12:15 齋藤宗昭（関西大学大学院）
ヴィジュアル系ロックの歴史—成立からブーム終焉まで

12:15～12:45 居原田遥（東京藝術大学音楽学部）

日本のカウンターカルチャーとしての音楽—ハードコア／パンクシーンから考える

14:00～17:00

▼ワークショップA 1号館2階1203教室
音楽文化の歴史社会学—知識人、大衆文化、社会運動

司会・問題提起者：粟谷佳司（立命館大学；コーディネーター）

問題提起者：平石貴士（立命館大学大学院）

討論者：鈴木慎一郎（関西学院大学）

▼ワークショップB 1号館地下1階1002教室

音楽文化におけるローカリゼーションの諸相

問題提起者：大山昌彦（東京工科大学；コーディネーター）

問題提起者：遠藤薫（学習院大学）

問題提起者：木本玲一（相模女子大学）

問題提起者：永井純一（神戸山手大学）

指名討論者：東谷護（成城大学）

指名討論者：安田昌弘（京都精華大学）

司会：山田晴通（東京経済大学）

▼ワークショップC 1号館2階1201教室
ポピュラー音楽の美学と存在論—今井論文をめぐるオープン・ディスカッション
問題提起者：増田聡（大阪市立大学；コーディネーター）

問題提起者：今井晋（東京大学大学院）

司会・討論者：谷口文和（亜細亜大学短期大学）

▼17:00～17:20 閉会セレモニー 1号館地下1階1002教室

◆information◆

理事会・委員会活動報告

■理事会

- 2012年 第3回理事会（持ち回り）
2012年 9月19日（議題送付）
2012年 9月26日（回答締切）
議題1 前回議事録案の確認
議題2 新入会員の承認
議題3 退会者の承認
議題4 2013年度大会の開催校について

事務局より

1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

次号(95号)は2013年2月発行予定です。原稿締切は2013年1月20日とします。また次々号(96号)は2013年5月発行予定です。原稿締切は2013年4月20日とします。

2011年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行して

おります。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター 担当(nl@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便またはEメールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

2011年より、NLの発行は年三回をPDF(学会ウェブサイトの掲載)にて行い、年一回八月発行号のみが紙媒体で送付されるかたちになっております。住所変更などの個人情報紙での発行号に集約して掲載いたします。

JASPM NEWSLETTER 第94号
(vol. 24 no.4)

2012年 12月 5日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 佐藤良明

理事 大和田俊之・小川博司・久野陽
一・谷口文和・東谷護・増田聡・
南田勝也・毛利嘉孝・安田昌弘

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研
究室

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：松井領明